

平成 30 年 6 月 11 日現在

機関番号：11601

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2015～2017

課題番号：15K02782

研究課題名(和文) 多様な英語に対するコンプリヘンシビリティを高めるための教材開発に関する研究

研究課題名(英文) Toward a Development of Effective Materials in Listening to Unfamiliar Englishes

研究代表者

松浦 浩子 (MATSUURA, Hiroko)

福島大学・経済経営学類・教授

研究者番号：70199751

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,500,000円

研究成果の概要(和文)：世界の諸英語(WE)や国際語としての英語教育(ELF)が注目されている中、多様な音声に対応できる学習者の育成を目標に、本研究では試行的教育を実践してその効果を検証した。まず、多様な英語で録画されたTEDトークを視聴し、聞き取り練習やコメント投稿が可能な Moodle 基盤の学習プラットフォームを構築した。その後、学習者に対して、馴染みのない英語の歴史的背景と音声学的特徴について講義し、学習プラットフォームを利用したアクティビティを行って、音声の理解度と受容態度への効果を調査した。短期間の授業実践は理解度に効果をもたらさなかったものの、受容態度にはある程度の影響を及ぼすことがわかった。

研究成果の概要(英文)： With the importance of teaching and learning World Englishes (WE) and English as a lingua franca (ELF) being recognized around the world, education practices need to keep pace. The investigators of this study devised a Moodle-based English learning platform using TED talks recorded in a variety of English accents, and investigated the effects of explicit and implicit instructions on actual comprehension as well as on attitudes toward accented English. In terms of the actual comprehension, the results suggest that students of intermediate proficiency did not benefit from instructions on phonological features of unfamiliar English or from limited-time exposure to that variety. On the other hand, some positive instructional effects were observed on students' attitudes toward unfamiliar English accents and learning WE and ELF.

研究分野：英語教育

キーワード：国際共通語としての英語 訛り 理解度 受容態度 明示的教育 暗示的教育

1. 研究開始当初の背景

地球上の英語の使用者は、ネイティブ・スピーカー、ノンネイティブ・スピーカーを含め、世界人口の4人にひとりとも言われている[Seidlhofer (2011)など]。この膨大な数の使用者の存在は、英語が国際語共通語としていかに重要であるかを示しているだけでなく、音韻、意味、統語、語用論などの言語学的特徴において均質でないことをも物語っている。このような現状を踏まえ、世界の英語教育界は、母語話者の英語(典型的には米語)をモデルに学習者の英語を限りなく近似させるといったゴールに加えて、多様な言語的背景を持つ話者間の英語を媒介とした相互理解を支援するという新たな目標を見出した[McKay (2002)など]。日本の英語教育界においても、様々な英語に対応できる能力の涵養を目標に、言語モデルや指導内容・指導方法について検討しなければならない時期にあることは言うまでもない。

国際語共通語である英語の多様性は広く認知されているにもかかわらず、教育現場ではアメリカ英語(教育機関によってはイギリス英語)のみを目標とした言語習得に焦点が当てられているため、英語学習者やビジネス等で英語を使う人々は、実際のコミュニケーションで発音や語彙表現の多様性に出会うと戸惑いを感じるだろう。そこで、本研究では多様な音声英語に対するコンプリヘンシビリティ(comprehensibility、理解度)涵養を目標に、「学習者に馴染みのない英語をどのような方法で教育現場に導入したらよいのか?」という課題を掲げて、試行的教育実践に基づく実証研究に取り組むことにした。

なお、本研究は、研究者が代表をつとめた科学研究費助成事業・基盤研究(C)「効果的教材開発を目指した多様な英語の理解度に関する研究」(平成24年度～平成26年度)の後継研究として位置づけられる。また、研究者が分担者として参加した教育工学分野の基盤研究(C)「相互学習に基づいたSNSに展開する英語のコミュニティの構築と参加する学習者の評価」(平成26年度～平成28年度)で得た知見に、国際語としての英語の教育的視点を加味した応用研究ともいえる。

2. 研究の目的

本研究の目的は、世界諸英語(World Englishes)の教育現場への導入方法を検討し、教育実践を通して得たデータから、その効果を検証することである。具体的には、インターネットを利用した学習プラットフォームを構築して、これを利用した実験授業を行い、学習者の音声理解度や受容態度の変化を観察することによって、新たな教授法を模索するものである。

3. 研究の方法

(1) 学習プラットフォーム WEnglishes の構築

前述した科学研究費助成事業「相互学習に基づいたSNSに展開する英語のコミュニティの構築と参加する学習者の評価」の成果をもとに、オープンソースのソフトウェア Moodle を利用して、インターネット上にある英語によるプレゼンテーション動画 TED にリンクを張ったオンライン学習プラットフォームを立ち上げた。ここでは、日本人学習者に最も馴染みのあるアメリカ英語、それに比して馴染みの薄いイギリス英語、ほとんど馴染みのないシンガポール英語とインド英語に触れることのできる4つのコースを設けた。アメリカ英語とイギリス英語は、Kachru(1992)による世界諸英語の3分類における Inner Circle English、シンガポール英語とインド英語は Outer Circle English に相当する。これら4つの英語変種の学習を目標とする各コースは、英語変種の歴史的背景と音声的特徴の解説、複数の TED トーク動画、英語スクリプト、日本語訳、英和辞典、TED 動画視聴後のアクティビティに使用する Forum、等で構成されている。

(2) 馴染みのない英語を利用した授業実践とその効果に関する研究

日本人学習者にとってほとんど馴染みのないインド英語とシンガポール英語について、教師がこの2つの英語変種について歴史的背景、語彙や音声などの言語的特徴を解説し、大学生被験者が実際に英語を聞いてみるという授業を英語変種ごとに2回に分けて行った。教師によるインストラクション後には、WEnglishes を活用した個別学習を課し、インストラクションと個別学習による教育効果をアンケートによって調査した。事前・事後調査は、同一話者によって吹き込まれた英語音声の理解度と受容態度の変化を可視化することを目的としている。ここでは、音声理解度をクローズ・ディクテーションによって、また受容態度をSDアンケートによって数値化した。SDアンケートは、「地位/能力(status/competence)」、「社会的魅力(social attractiveness)」、「言語的質(linguistic quality)」の3つの観点について9組の形容詞対(例:知的でない-知的である、信頼できない-信頼できる、訛りがある-訛りが無い)と7段階の数字で評価するというものである。加えて、自由記述アンケートを実施し、馴染みのない英語を聞いた感想、またこの研究で行った学習方法に関する意見を自由に記述してもらった。

4. 研究成果

(1) インド英語の明示的インストラクションと個別学習について

大学生を対象に、インド英語の歴史的背景と音声的特徴について解説するという明示

的インストラクションを行い、その効果について音声理解度と受容態度の両面から調査した。音声的特徴については、榎木園(2016)を使用し、(a)独特な子音、(b)独特な母音、(c)つづり字に即した発音、(d)異なるリズムとイントネーション、(e)速いスピードの5点に的を絞って、音声例を呈示しながら説明した。その後、WEnglises にリンクさせた TED トーク(教師があらかじめ選択した”The Thrilling Potential of SixthSense Technology”など)を学習者に視聴させて、インド英語に親しんでもらった。

1)理解度に関する調査

研究参加者は、1年次、または2年次の英語科目を履修する57名の日本人大学生である。教師が実験群(n=29)に対して明示的インストラクションを行ったのち、学習者がTEDを聞いてForumにコメントを投稿するという活動を行った。なお、授業前後にはクローズ・ディクテーションを行い、事後アンケートでは実際にTEDトークを聞いた総回数を記述させて、ディクテーション得点の伸びとの相関について調べた。

クローズ・ディクテーションに関しては、インストラクションの前後で平均点に大きな変化は見られなかった(事前:14.50、事後:14.89)。また、実際にTEDを聞いた総回数とディクテーションスコアの変化(事後-事前)との間に有意な相関は得られなかった。Lindemann, et al. (2016)が行った母語話者に対する韓国人英語の理解度に関する先行研究では、インストラクション後に肯定的効果が報告されている。本研究の参加者である中級レベルの学習者は、母語話者と異なって、インド英語の特徴を比較しながら対照的にとらえるために必要な基準となる英語発音(例えば、アメリカ英語の発音)を限定的にしか習得できていないことが、得点が伸びなかった理由として考えられる。また、参加者が音声学的インストラクションに慣れていなかったこと、実際にインド英語に触れる時間が短時間であったこと、事前・事後調査で聞いたパッセージが異なったこと、なども要因として挙げられるだろう。

2)受容態度に関する調査

参加者は、理解度調査とは異なる44名の日本人大学生グループ(うち19名が実験群)である。榎木園(2016)を用いてインド英語の音声と歴史的背景について明示的インストラクションを行った後にTEDトークを視聴してもらった。その前後にSDアンケートと自由記述式アンケートを介して、インド英語に対する受容態度を調査した。

SDアンケートでは、インストラクション前後で、「地位/能力」の平均点がほとんど変化しなかった一方で、「言語的質」に関する平均点は低下、「社会的魅力」は逆に上昇するという結果が得られた。ここでの「言語的

質」評価の低下については、「わかりやすさ」の評価が低下していたことが関係している(事前:3.26、事後:2.80)。他方、「社会的魅力」については、参加者全員で視聴したTEDトーク”Ideas for India’s Future”が事後評価に間接的に好影響を与えた可能性が指摘できるだろう。トークはインドの明るい未来に関するもので、若いインド人が国に与える可能性、また公用語である英語が国の資産となる可能性が強調されている。

(2)シンガポール英語の明示的・暗示的インストラクションと個別学習について

参加者とデータ収集方法

90名の日本人大学生被験者を、シンガポール英語について明示的インストラクションを受けるグループ(実験群1)、暗示的インストラクションを受けるグループ(実験群2)、どちらのインストラクションも受けない統制群に分けた。これら3グループ(各30名)には、シンガポール人が音読した複数の短いパッセージを聞いてもらい、クローズ・ディクテーション及びSDアンケートによって理解度及び受容態度を事前調査した。

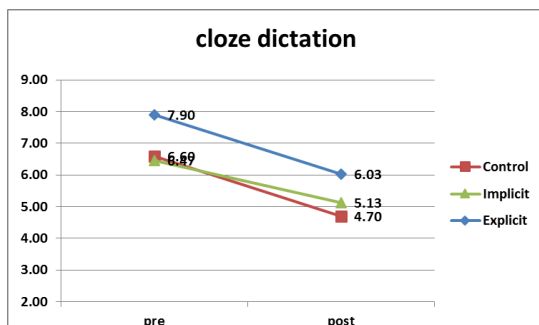
その後、インストラクションとして、実験群1には、田中・田中ら(2012)による文献を参照しながら、シンガポール英語の歴史的背景と言語的特徴を教師が講義し、実験群2には歴史的背景についてのみ講義した。両実験群には個別学習として、シンガポール英語のTEDトーク(Driving the Burma Road during WWII)を視聴しながら、内容理解を確認する多肢選択問題、及び聞き取り練習(クローズ・ディクテーション)を与えた。また、Forumを利用した学習活動を行った。ここでは、”What did you learn from the talk?”という教師の問いに対して、学習者がTEDトークの内容に即した自身の意見を投稿した。これらの諸活動により、学習者はTEDトークを繰り返し視聴することになる。

翌週、実験群1、実験群2、統制群の3グループに対して事後アンケートを実施した。

結果と考察

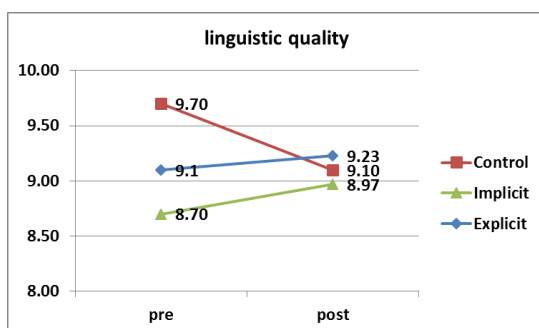
クローズ・ディクテーションによる理解度調査では、実験群1、実験群2、統制群ともに事後に得点が低下している(図1)。これは、事前事後調査ともに英語の読み手は同一人物であるものの、事後調査で使ったパッセージの英語が事前調査に比べて難解であったことが影響したものと考えられる。また、実験群1については、教師による音声学的解説が有意な効果をもたらさなかったが、これは前述したインド英語の調査と同様、参加者が音声学的内容の講義に慣れていなかったこと、母語話者のようにシンガポール英語との比較参照が可能な発音モデルを限定的にしか身に付けていなかったこと、シンガポール英語に触れる時間が短かったこと、などが要因と考えられる。

図 1



受容態度については、有意差はなかったものの、実験群 1、実験群 2 とともに「言語的質」評価において平均値の上昇が見られた（図 2）。ここでは統制群の評価が低下していることに注目したい。

図 2



受容態度に関わる残り 2 つの観点「地位/能力」と「社会的魅力」については、事後調査において、実験群 1 と統制群で特に評価が大きく低下した。英語の聞き取りにくさが話者の人物的評価に影響を及ぼしたのかもしれない。一方で、上で指摘したように、実験群の「言語的質」に関する平均値が低下していないことから、TED の視聴が「言語的質」評価に何等かの影響を与えたものと推測される。

事前調査の自由記述アンケートでは、以下の回答例が示す通り、参加者の多くが独特なシンガポール英語に困惑したことが読み取れる。

- ・イントネーションが独特である
- ・単語をはっきりと発音していないと思った
- ・訛りが強くて聞き取りにくかった
- ・短くなったり詰まったりして、聞き取りにくかった

一方で、事後調査では参加者の多くが馴染みのない英語を受け入れ、またインターネットを介した英語学習に肯定的態度を示している。回答例は次の通りである。

- ・普段触れることのない英語を聞くよい機会であった
- ・アメリカ・イギリス以外の英語を聞くことができてよかった
- ・新鮮で面白かった

・英語の学習に最適であると思った

(3) 英語教育への示唆と将来の研究に向けて

本研究では、TED の公開動画を活用して、多様な母語背景を持つ話者の英語によるスピーチを視聴できるサイトを作成した。このようなインターネット上の多様な英語は、グローバル社会を生きていく日本の若者にとってよい学習教材となり、多様な英語の話者はよいロールモデルとなるだろう。WE や ELF を念頭においた英語教育で、活発なインターネット利用が期待されるところである。

本研究では、多くの日本人にとって馴染みのない英語に関するインストラクション、及び TED 動画の視聴が音声理解度向上にほとんど効果をもたらさなかった。また、言語態度に関しては、自由記述アンケートにおいて肯定的変化が見られたものの、SD アンケートでは事前・事後の有意差は確認できなかった。通常の英語授業を利用したインストラクションと短時間の動画視聴には限界があることが判明したため、今後は長期的な計画に基づいた授業を行って、その効果を多角的に検証することが必要であると思われる。

また、本研究では学習者の年齢や総合的英語力を考慮した研究を行っていないため、このような観点を含めた研究も将来必要であると思われる。本研究ではこれまでアメリカ英語に親しんできた英語力中級レベルの大学生を被験者としたが、母語話者を対象とした Lindemann, et al.(2016) 研究とは異なって、インストラクションの効果が観察できなかった。そこで、多様な英語に触れるのは初級・中級学習者よりも、上級学習者の方が適しているのではないかと、という疑問があらたに生じた。他方、いろいろな英語に触れ始める時期は、米語の音声モデルを聞きながら一定の英語力を修得した大学生ではなく、音声に対する感受性が豊かな若い学習者の方がよいのではないかと、という考えも研究者の中に芽生えた。これらを今後の研究課題としたい。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計 2 件)

- Hiroko Matsuura (2017). Listening to Unfamiliar English Accents: Japanese ELF Learners' Perceptions and Comprehension. *The Shogaku Ronshu [Journal of Commerce, Economics and Economic History]*, 86, 1, 1-11. 査読有
- Hiroko Matsuura (2016). Tertiary Level Japanese Students' Attitudes toward Unfamiliar English Accents. *The Shogaku Ronshu [Journal of Commerce, Economics and Economic History]*, 84, 3, 5-15. 査読有

〔学会発表〕(計 5 件)

Hiroko Matsuura & Reiko Chiba (2018).
The Explicit Instructional Effects on
EFL Learners' Listening
Comprehension of an Unfamiliar
English Accent. AAAL 2018. March 24.
Chicago, U.S.A.

松浦 浩子、宮本 節子(2017). TED と
Forum を利用した技能統合型の英語教
育:投稿語数から見えること、第 45 回日
本言語テスト学会研究例会、7 月 8 日、
福島大学

Hiroko Matsuura & Reiko Chiba
(2017).Teaching ELF to EFL Students:
Effects of Explicit and Implicit
Instructions in Listening to an
Unfamiliar English Variety. ELF 10.
June 12-15. Helsinki, Finland.

松浦 浩子、宮本 節子、飯野 一彦
(2016). Forum を利用した交流サイトに
おいて投稿意欲を喚起・阻害する要因は
何か、外国語教育メディア学会第 56 回全
国研究会、8 月 8 日、早稲田大学

Hiroko Matsuura & Mayuko Inagawa
(2015). Exploring Perceived
Comprehensibility and Actual
Comprehension in English as a Lingua
Franca. Eurosla 2015. August 28.
Aix-en-Provence, France.

6 . 研究組織

(1)研究代表者

松浦 浩子 (MATSUURA, Hiroko)

福島大学・経済経営学類・教授

研究者番号 : 70199751

(2)連携研究者

千波 玲子 (CHIBA, Reiko)

亜細亜大学・国際関係学部・教授

研究者番号 : 10227332